



日本が見えた…

文/写真:畑尻 郷 (はたじり・あきら)
協力:近鉄インターナショナル・シカゴ支店



私が小泉八雲という人の名を知ったのは、小学校の時だった。幽霊やらお化けやらを本気で信じていた頃の私は、いわゆるこの「怪談」というやつにはとても興味があつた。高校生くらいだったであろうか、その小泉八雲が外国人であることを知る。小泉八雲＝ラフカディオ・ハーン。まもなく彼の傑作集「知られぬ日本の面影」を手にする。その最後の方の章にあった「日本人の微笑み」という小さなエッセイをみつける。要約すると「日本人はその器用な手先を使って、巧みに進化し、やがて欧米を凌駕(りょうが)する程の凄い国になるだろう。でもその頃の日本は今(小泉八雲がいた明治40年当時)のような日本ではなくなっていることだろう。そうなったとき、日本人は村や町の隅にある石仏の微笑みに気が付くだろうか。それが日本人があたり前に持っていた微笑みであることを…」。

長い前置きになったが、3月の終わりに鳥根に行く機会があった。最近はどうも日本に帰国するときにいわゆる、地方へ行くことが多い。前回小豆島の時と同様、本部からの連絡で、ぜひ来て奥出雲を知ってほしいという奥出雲町商工会との共同プロジェクトである。

鳥根県の玄関となる空港は出雲空港だ。羽田からは日本航空、大阪・伊丹と福岡からは日本エア・コンピュータでのアクセスがある。シカゴからは成田・羽田の移動はあるものの、同日接続も可能だ。羽田から1時間ちょっとで出雲空港に到着する。宍道湖のほとりにある小さな空港だ。

宍道湖は鳥根県を代表する湖だが、その水質は汽水(海の水と淡水がまじりあっている)である。そのため昔からうまいものがよく取れる。特にその中のうまいものは七珍と呼ばれ、スズキ、うなぎ、鯉などがそれらである。またしじみに関しては全国の7割以上が宍道湖産であるという。宍道湖なくしてはしじみ汁は食べられないのである。

空港でレンタカーをピックアップする。今、トヨタレンタカーは全車種カーナビ付なので、見知らぬ地でも全く問題ない。検索機能で目的地である横田町(現、奥出雲町)を選択。行程は約1時間半と出た。出雲空港から国道を使って木次(きすき)という町に着く。ここが奥出雲の玄関とな

る。朝から何も食べていなかったの、この「道の駅」でラーメンを食べる。尾道ラーメンで、ダシはこってり鶏ベースだ。バラ肉チャーシューと煮卵のトッピングは最高であつというまにすすり上げてしまう。もの足りなさを感じたので、替え玉をオーダー。やはり日本のラーメンはうまい!



木次を過ぎると、道が急に細くなる。対向車が来ると擦ってしまいそうになる様な山道を暫く走ると やがて開けて町が見える。仁多町に着いた(4月に横田町と合併し、現、奥出雲町)。この仁多町で獲れる米は東の魚沼、西の仁多と呼ばれるほどの米どころで、町の至る所で、この「仁多米」を謳っている店やレストランを目にする。

仁多を過ぎるとまもなく、横田に着く。人口約7000人(合併後、16000人)のこの小さな町は古くから「たたら」で有名な場所だ。「たたら」とは古くから日本にある製鉄法で、蹠踏(さつづ)と木炭を高温で熱することによって製鉄する方法だ。この「たたら」という言葉を聞いて「ものけ姫」と思い浮かぶ人人も少なくないだろう。この奥出雲、横田はあの宮崎駿の名作、「もののけ姫」の原案になった場所だ。あの女たちが「たたら」を踏み、鉄をつくるシーンはこの横田のたたらから来ている。また神話のふるさとであるこの地域から、あの「ものけ姫」のヒントを得たとも言われている。この地方に伝わる有名な神話のひとつに「ヤマトノオロチ」の話がある。村人が恐れていた巨大な蛇(おろち)を退治する昔話だ。ちなみに横田の町はそのおろち退治をしたときの舞台になった山のふもとにある。その伝説の神話でおろちを天誅を加えるのが「日本刀」である。先述のたたらの中で、特に純度が高いものを玉鋼(たまはがね)と呼びそれを鍛えて日本刀に

する。これはこの奥出雲の横田の重要な伝統工芸だ。この玉鋼を作る技術は非常に高度で、いまの最新技術をもってしても難しいものらしい。「奥出雲・たたらと刀剣館」へいくとその行程やしくみが詳細に説明してある。この資料館の入り口に大きなオブジェがある。1985年のつくば科学博にも出展された「やまたのおろち」である。なかなかのものだ。



国道を走っていると妙な列車が走っている。宍道から広島県との県境の備後落合までの単線のローカル線だ。奥出雲にある出雲坂根という駅から、三井野原駅まで急勾配がある。これをスイッチバックという方式でジグザグに登っていくための列車で、トロッコ列車という。夏場にかけてはこの列車に乗り込むのが遠くから来るファンも多い。夏場はこのトロッコ列車で三井野原駅まで登って行って、帰りは自転車まで下ってくるのも人気だとか。しかし、こんな急勾配をどうやって下ってくるのかと聞くと、車で連れて行ってもらったのが「奥出雲おろちループ」である。三井野原からループを描いて出雲坂根まで下ってこれる非常にユニークな道路があるのだ。そのループの描き方を、神話のヤマトノオロチにひっかけてこの名称が付いている。ずっと軽快な下り坂はさぞ、自転車だと気持ちの良いことだろう。



一通り奥出雲を見たあと、「民宿たなべ」にこの日は泊ることにした。特筆すべきは岩魚料理と温泉である。横田町からは車で20分くらい更に奥に入る。まだ雪が少し残る山間に民宿があった。宿内は囲炉裏があり、香ばしい木炭の香りがする。部屋に案内されると、コタツに畳の8畳間だった。懐かしいような不思議な雰囲気にも包まれる。夕方

4時くらいだが、もう温泉が使えるということなので、早速一番風呂をいただくことにした。商工会の人が、「入っただけで肌が石鹸で洗ったようにつるつるになりますよ」とのことだったが、本当にその通りで湯上りは自分自身がピカピカになった感じだ。体も温まり最高の気分です部屋に夕食の準備が出来たとのこと。囲炉裏を囲んでの楽しい食事だ。岩魚の塩焼きとお刺身、なめ茸と自然薯(じねんじょ)の小鉢、ぜんまいのお味噌汁、そしてこの奥出雲で有名なわりこそばだ。岩魚の塩焼きは頭からかぶりつく。刺身は舌の上でとろけるようだ。自然薯はもちもち感が全ての官能を刺激する。ぜんまいのお味噌汁は全身の血がきれいになるようだ。そしてわりこそばは、思わず「おかわり!」と叫びたくなるような喉越しである。(この私の感動を想像してください!)



まさに命の洗濯とはこういうことをいうのだろう。奥出雲を訪れた私は明らかに変わっているのを感じた。商工会の人にこのことを話すと、にっこりと微笑みながらこんなことをお話ししてください。「人の心を感動させるものは、偽りのものでは出来ないんです。どんな場合も本物しかないんです。本物は一朝一夕では出来ません。伝統や風土、そして何よりも多くの人の力が必要なんです。奥出雲は一見何も無いように見えますが、あるものは全てが本物です。だから必ず人の心を捉えることが出来ます。」

日本でいわゆる観光地はたくさんものが溢れている。勿論その伝統や文化を紹介することもあるが、たいがいの場合は文明を紹介していることが多いことに気づく。もっとも日本はその素晴らしい文化を文明に置き換えて、今日まで発展してきた。一概に文明を否定することはできないが、日本人が日本人であるが故に、いま振り返るときが来ているのかも知れない。商工会の方が最後に私にくれた微笑は忘れぬものになった。日本人の格好をした日本人でないこの私に「なにか大切なものを忘れてはいませんか?」というものを問い掛けられたのかも知れない。私もアメリカに来ては、13年の年月が流れた。今、私の顔を見たとき、小泉八雲は日本人と認識出来るかどうか不安なものだ。